

◆この資料は、親と子、それぞれの思いと、専門家に向けてのメッセージをまとめたものです。

どもる我が子に親ができること

元聾学校教員・どもる人 佐々木和子

我が子がどもった

私の息子大輔は3歳6ヶ月になったある日突然どもり始めました。バスが大好きで車窓から見えるバス停をいつものように唱えていた時、「新敬川」のバス停の前で「しんううううやがわ」とつかえたのです。このつかえに私は動揺しました。「まさかどもったのでは・・・」という不安の中で「今のつかえは何かの間違いで、次に話す時はいつも通りに話せるだろう」と、信じようとしてしました。しかし、この一言をきっかけにして、息子は話すことば一言ひとことにどもるようになりました。「なぜ?」「今まで流暢に話していたのにどうして話せなくなってしまったの?」と、私はその事実を認めることができませんでした。

親の思い

私もどもる人です。今でも自分の意志に反してことばが出ない状態に陥ります。そんな私が自分のどもりは置いといて、息子のどもりを何とか治そうと躍起になりました。つかえようと思っつつつかえている訳ではなく、自分ではどうすることもできないのがどもりであることを知り尽くしているはずの私が、幼い息子に、どもる症状を自分でコントロールして流暢に話すことを要求し続けました。大学で言語障害児教育を専攻し、どもりについて学び、「どもることは悪いことではない」「どもりに負けない子どもを育てればいい」と頭では理解していても目の前でどもる息子を見ると心にさざ波が立ち始め、それが大きな波のうねりとなって爆発するのです。「**どもらないで!**」と。

私が息子のどもりを治そうとすればするほど、息子はしゃべれなくなっていきました。1カ月もすると息子は重度難発性吃音児になり、保育園で先生に「おはようございます」と言うことすらできなくなっていました。私は息子のことばを聞くこと、どもる姿を見ることに耐えられなくなり、ついには息子と一緒にいることができなくなりました。

息子のどもりにこだわり、拒否し続ける私を見て、夫は「どもったっていいじゃあないか。自分のどもりは認めているのに、なぜ息子のどもりを認めてやることができないのか?僕には理解できない。認めてやればいい」と私を説得しました。私はそのことばを聞き入れることはできませんでした。私のどもりは自分のことなので、どうにもならないもの、治らないものと実感し、諦めることができました。認めないと生きていくことができなかったのです。しかし、息子はつい最近まで、どもらずに話をしていたのです。つかえたことばの言いなおしをさせて、症状を消していけば元の話し方に戻るような気がするのです。専門書にも幼児期の吃音は80%治ると書いてあります。治る可能性があるのだから、親である私は決して諦めずに何としてでも80%の中に入れてくなくてはならないと考えていました。

治したい思いは親の課題

心身共に疲れ果てた時、私は伊藤さんから「子どものどもりの問題は、結局は自分自身の問題なんだよ」と、アドバイスをもらいました。「なぜ治したいのか」と問われたら、私は「どもると息子が不利益を被るに違いない。将来、彼が傷つかないように、苦労しないように、息子のために今のうちに治したい」と答えていました。

しかし私の心の奥底には「息子のために」と言いながら、実は、息子がどもる人として生きることに対する私の不安を解消するために、そして、息子がどもる姿を世間にさらすことで私が嫌な思いをしないように、だから「私のために」治って欲しいという思いが強くなることに気づきました。息子の存在までも否定するほど、私を苦しめていたのは、結局どもりを劣ったもの、治すべきものと価値づけている私自身の考え方だったのです。

幼児期の「子どものどもりを治したい」という親の思いは、親が解決する課題なのです。子どもは、

どもりを治すことよりも、ただどもる自分を認めて欲しいと願っているのではないのでしょうか。親は子どもを変えようとするのではなく、自分のどもりに対する考え方を変える学びをする必要があると考えます。

我が子をありのまま認める

私が息子のどもりを治すことを諦めることができたのは、私自身が治っていないという事実から「どもりは消えることがあっても、治そうと努力して治るものではない」ことが真実であると確信したからです。

「治す」という行為は、悪い所を望ましい状態に改めることであり、どもりを治す取組には、「どもりは悪いもの、どもるあなたは劣っている」「今のままのあなたではいけない」という自己否定のメッセージが含まれています。どもりが治ることを期待され続ける子どもは、いつまでたっても治らない自分の力の無さを責め、自己否定の連鎖の中で苦しみ続けることとなります。治るはずのどもりが治らないことがどもの最大の苦しみであることを私は身を持って体験していました。同じ苦しみを息子に味わわせたくないと願うならば、私にできることは「治すことを諦める」ことだったのです。

治すことを諦め、息子をありのまま認めることができるようになり、私はようやく本来の親子関係を取り戻すことができました。また、私には「どもりで苦しい思いをしてきたけれど、悪いことばかりではなかった。どもりながら、仲間に支えられてそれなりに生きてきた。どもっていてもなんとかなった。」という、どもりを生きた実体験がありました。「私にできたことなのだから、大輔にできない訳がない。大輔の人生は大輔に任せよう」と考えるようになりました。

「人生のテーマが吃音ではない」ことについて語るときに僕の語ること

大学1年 佐々木 大輔

姜尚中氏の『悩む力』が出版され、ブームになったのが2008年だから、僕が小学6年生の頃だったと思う。伊藤さんの勧めで、この本を母が購入した。読んだ後、母と吃音について話していた時、母が次のように言った。「私は吃ることが障がいとなって、人が苦手で学校が大嫌いだった。私にとって吃音は人生のテーマだった。でも大輔は人が好きだし、学校が大好きな人だよ。大輔と吃音の話をして、悩み方が浅いというか、物足りなさを感じる。もっと真剣に悩んで欲しいのだけど、いつも手ごたえなく終わってしまう。明らかに私とは違うんだよね。あなたにとって、人生のテーマは吃音ではないということなのかな？」以前から吃音で悩んだことはないとは思っていたのだが、母の「人生のテーマは吃音ではない」という言葉で、そのぼんやりとした感覚が明確に意識できるようになっていった。

僕は5歳のときに吃音ショートコースに参加したのをきっかけに、幼い頃から吃音サマーキャンプや島根スタタリングフォーラムに参加した。このことで、「吃音は治るものではないし、どう付き合っていくかが大切である」ということや、吃る人が自分や母親だけでなくたくさんいることを知ることができ、またそのような吃る人と関係性を持つことができた。このことは、今思えば大変価値のあることであった。なぜならば、吃音問題の本質をとらえたり、吃る人と親密で満足できる人間関係を結ぶことができたことで、吃音に自分の人生を支配されることなく、自分が人生の主役になれることができたと考えているからである。

僕は、吃らない人に比べたら流暢に話すことはできない。『吃る』話し方が僕の話し方なのだから、うまく付き合っていきたいと思っている。そして、この思いを持ち前のポジティブさで実行している。『吃る』ことが僕にとってはそんなに気にならないことが、僕の人生のテーマが吃音ではなくなっている理由なのではないかと考えている。

もちろん、そのきっかけを与えてくれたのが、今でも交流のある伊藤さんをはじめとした吃る人たちであり、その空間に僕を連れて行ってくれた母であることは間違いのないことである。

当事者の立場からレジリエンスを考える

－専門家へのお願い－

元豊学校教員・どもる人 佐々木和子

はじめに

私はどもる自分を認めることができなくて、「私は存在する価値がない」と考えていました。苦しかった学童期・思春期の頃は「私には自己肯定の感情なんてない」と思っていました。しかし、振り返ってみると、苦しさが限界になった時「悩んでもしかたがない、まあいいか」という楽観的感情が湧き上がり、辛さを一時凍結し、困難な状況をしのいでいたことに気づきました。たとえ最低の自分であっても、自分を許し、認める感情が私のこころの奥の深い所に残っていたのです。

元気だった幼児期

私は3歳からどもり始めました。両親から「どもりを治す」よう求められたことはありません。両親が「治す」ことに拘らなかつたのは、周囲に勧められて児童相談所に相談に行った時「この子は知恵が早いからどもるのだ」と説明され、吃音に対して悪いイメージを抱かなかつたことが挙げられます。それに加えて、母親は親友がどもる人だったので、その人の前向きな生きざまを見て、漠然と「どもっていても大丈夫」と受け止めていたようです。父親は「自分も“うっ”と詰まってことばが出ない時があり、話すことが苦手だけれど、なんとかやっている。女の子だから多少話せなくてもなんとかなるだろう」と考えていました。

幼児期の私の姿を思い出しては「毎日汗びっしょりになって遊んでいた。人前で歌うことが好きで、得意になって大きな声で歌っていた。おしゃべり好きでことばが出ない時は一所懸命にからだを叩いて話していた」と語っています。どもることを重大な問題とは捉えていなかった両親のもと、私は自信をもって元気に過ごしていたのです。

苦しかった小中高校時代

そんな私が小学校に入学し、音読や発表の場面でことばが出ない体験を繰り返すうちに、「どもることは恥ずかしいことである」と認識し、人前で話すことを避けるようになりました。私は「どもりに臆さず話して欲しい、どもりに負けないで欲しい」と願う両親の期待に押しつぶされないように、子どもなりの知恵を駆使して、1年生の時から保健室に避難したり、苦手な音読があたる日はずる休みをしながら、何とか折り合いをつけて学校生活を送っていました。

5年生の時、私が一生懸命にどもりながら音読した3行を次の子に読み直すよう指示した担任教師の言動で、私は、苦しい思いをして頑張っても、どもったら認めてもらえないことを知り、どもることは悪いことで存在してはならないことを学びました。勇気を振り絞ってどもりながら話す私の努力は無駄なことであると理解し、私は人前で話すことを止めました。それからの私はどもることを隠すために、惨めな自分の姿を隠すために、話す場面から徹底的に逃げました。学校で指名されても無言で通しました。

私が話すことを止めたのは「どもることでこれ以上傷つかななくていい」と自分を守るための決断だったように思います。私には守らなくてはならない大切な自分があったのです。私が私として存在するためには、当時の私には自分を閉ざすしかなかったのです。

私が他者と違う自分に劣等意識を持ち「どもりを治したい」と両親にSOS発信をした時から、両親のどもりに対する考え方が変わっていききました。どもることは重大な問題であり、親がなんとかしてやらなくてはならないと考え始めたのです。両親はどもることで苦しんでいる私を「かわいそう」と感じて、どもることで私が傷つかないように、全面的に守ってくれるようになりました。この時から私は「かわいそう」な存在になりました。

「どもりで苦しんでいる娘を助けてやるのが親の務め」と考えた両親が心配して守ってくれればくれるほど、どもる私は「かわいそう」な存在で、親に守られていないと生きていけない無力な存在であると認識することになりました。親に依存し、自分一人では何もできない状態（話す場面は両親に代弁してもらおう、人と交わろうとしない等）になり、どんどん劣等意識が強くなっていききました。両

親の私を思う愛情が、どもりの問題を一層深刻にさせ、私から生きる力を奪ってしまうことになったのです。

どもりに向き合い始めた大学時代

大学を選択する時、私はどもりが認められる場所という理由だけで大阪教育大学を選びました。高校の先生や周囲の人は、どもることを恐れて話そうとしない私の姿を見て「教員養成の大学に行くより、話さなくてもよい職業に繋がる大学を選んだ方が良い」と忠告してくれました。両親は「どもりに悩んでいる娘に、もう親にできることは何もない。どもりを専門に学ぶ大学なら、娘が一番必要とするものが得られるかもしれない。少しでも強くなって帰ってきて欲しい」と私の選択を認めてくれました。大阪なら親しい親戚がいるので、何かあった時はすぐにフォローしてもらえるとという安心感もあったようです。

親元を離れた生活で、大阪教育大のどもりをマイナスに評価しない恵まれた環境で、私は必要に迫られて、「話すか、話さないか」を自分で慎重に選択し、少しずつ話す場面に出ていくようになりました。私は自分が「話す」と決めて話した場面では、たとえひどくどもっても、話すことができたのだから「成功」と評価していました。小さな成功体験を積み重ね、またどもることを特別視しない友人集団に支えられ「どもる私にできるはずがない、教員免許なんていらぬ。絶対に行かない」と言い張った「教育実習」にも行くことができました。

そこで私は子ども達と一緒にいる時間が心地よいこと、子ども達とつくる授業が楽しいことを発見し、教員という職業に就く道を初めて考えるようになりました。「教員採用試験を受けてみる」と私が言い出した時、両親は「娘が決めたことだから」と反対はしませんでした。むしろ「受けるからには合格して欲しい」と応援してくれました。「大学に行って少し変わったので、なんとかなるかもしれない。ダメなら、その時考えればよい」と考えていたのでしょう。

両親からのギフト

両親もどもりに悩む私を育てる中で、「どもり」という正体不明の魔物と格闘していたように思います。私が傷つくことを心配して、私が言うべきことを代わりに話してくれたり、私に自信をつけさせようとして、強引に話す場面に立たせようとしたり、両親なりに私を「何とかしよう」と様々な対応をしていました。ただ「どもりは治そうと努力しても治るものではない」ことは何となく理解し、治す努力を私に求めたことはありませんでした。「どもりは治る、治さないと将来子どもが苦勞する」という社会の無責任なことばに揺れながらも、根底では「何とかなるだろう」と、どもる私を認めてくれていたことを今改めて感じています。

私は両親のまなざしから「あなたはあなたのままでいい、あなたは存在する価値がある、あなたには力がある」というメッセージを受け取り、「私は私のまま、どもる私のまま存在していい」と、自分の存在に対する自信を構築していくことができました。この根拠のない自信が、どもることで傷つき人生に絶望していた私を支えてくれました。人は自分を丸ごと受け止めてもらえた経験があれば、困難に押しつぶされそうになっても、大切な自分の存在を守るために、レジリエンスの力を働かせ、サバイバルしながら生きていくことができると思います。子どもの育ちに必要なのは、ありのままの自分の存在を認めてもらう原体験であると考えます。私は、自分の存在に対する自信をもつことが、レジリエンス（回復：元気な自分を取り戻す）の核になると考えます。

おわりに

どもる子どもの問題の大きさは、親のどもりに対する概念、価値観に大きく左右されると考えます。子どもの将来を憂いて「治したい」と願う親のニーズに対して、専門家のみなさまには、子どもの流暢性の改善を図る指導よりも、親のどもりに対する不安を軽減する学びに同行することで、応えていただきたいと思います。親が「どもる子どもをありのまま認め、どもっていてもなんとかなる」と思えることができれば、子どもはそのまなざしを受けて、自分の存在に自信をもち、自分の人生を歩んでいくことができると考えます。子どもには、その力があると思うのです。